【試し読み】

丸山徹『キリシタン世紀の言語学―大航海時代の語学書―』

（2020 年 7 月 15 日刊行、八木書店）

１　はじめに（i - v 頁）

２　目　次（vii - xi 頁）

３　索　引（355 - 358 頁）

本書の詳細は下記サイトをご覧ください。

https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/2228

はじめに

フランシスコ・ザビエルに継ぐ形で来朝し、戦国時代の日本に大きな足跡を残した宣教師ルイス・フロイスとジョアン・ロドリゲスは、共に 16 世紀のポルトガルに生まれている。若くして日本にやってきて[1)]、その後長い間日本の宣教活動に携わる。その間、フロイスは大作「日本史」[2)]を完成させ（出版には至らず）、ロドリゲスも二つの日本語文法書[3)]を執筆、出版する。

フロイスがあの膨大な量の「日本史」を執筆する力はどこから出てきたのだろうか。ロドリゲスに極めて高いレベルの文法書を書かせる原動力となったものはいったい何だったのだろうか。二人のキリスト教信仰が土台にあったことは間違いないのであろうが、そこから発する使命感だけによるものなのか。

「天正遣欧使節」と呼ばれる伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノの四人は十代にしてヨーロッパへ派遣され、各地で歓迎を受けた後、ローマで時の教皇グレゴリウス 13 世に謁見している[4)]。中浦ジュリアンは帰国後、激しい弾圧の中で殉教するが、その死に際し毅然と「ローマに赴いた中浦ジュリアンである」と言い残したとも伝えられている。

布教の対象とされた日本。その現地の少年たちがヨーロッパ各地を訪れた後、教皇に謁見する街ローマ。そのローマをフロイスもロドリゲスも見たことすらないのである。そうしたことが二人の上に何の感慨も引き起こさなかったと見るほうが不自然な気がする。

本書の性格上、フロイス[5)]についてこれ以上語ることはできないが、こうした中で芽生えたに違いない感情がロドリゲスの言語観にどんな影響を与えているか、それについては少しだけ申し述べておきたい。本論集には一つだけ英文

の共著論文が収めてある（本書 2-2）が、この論考をふたりで書いている時、私には共著者バロン氏が通事ロドリゲスに託し自分自身を語ろうとしているのではあるまいかと思えてきた。

氏はスコットランドのグラスゴーに生まれ、15 歳まではそこで教育を受けている。幼少期に習得した母語で彼から話しかけられたことがあるが、まったく理解不能、一語たりと把握できなかった。大学はアメリカのペンシルバニア大学である。彼の英語が周りの人達にどのように受け取られたかは想像に余りある。私自身はバロン氏と 50 年来の付き合いであるが、人として素晴らしい方であると同時に相当な頑固者である。書き残されたものから察するにロドリゲスもまたバロン氏と同じくかなり頑固であったに相違ない。自分は田舎者で文章もうまくないと言いながら、心の奥底では自分自身の言語規範にゆるぎない自信を持ち、いやしくも言語に係ることでは決して人に譲ることがない。それは彼の天才的言語能力に裏付けられたものではあるが、どこかに自己の言語意識・言語規範に対する執着のようなものがあったように思われる。第 2 章所収邦文諸論をも参照されたい。

同じ大航海時代にインド・ゴアの現地語コンカニ語文法を著したトーマス・スティーブンスやコンゴ現地語でドチリナキリシタンを編纂したマテウス・カルドーゾはどうだったのだろうか。まだその生い立ちを深く探るところまではできていないが興味は尽きない。第 4 章諸論を参照されたい。

大航海時代というのはそれまで各文明圏それぞれに為されてきた生活が一挙に世界一体化した時代でもある。そしてその後、特にここ 200 年ほどのグローバル化の主体を担ったのはキリスト教圏欧米である。そうした、ギリシャ・ローマに端を発しキリスト教の影響を大きく受けその後の啓蒙思想に象られて成立した「近代ヨーロッパ」というものが、（時間的に）長い歴史の中でも、（空間的に）世界全体の中にあっても、決して普遍的なものではなく、むしろ「例外的」な存在であることが、政治・文化の面でも明らかになってきた[6)]。実は言語についても同じことが言えるのではあるまいかと考えている。キリスト教・啓蒙思

想のもとに形作られてきた近代の英・独・仏語は、歴史的（時間的）に見ても地域的（空間的）に見ても、決して一般・普遍的な存在ではなく、むしろ言語のあり方としてある意味「例外的」なものであった、あるいは少なくともそうした側面を持っていたと言えよう。それについて論じたのが第 5 章所収論文(5-1）である。

本論ではさらに踏み込んで、そうした中で、私たちはこれからどのように生きていくのがよいのだろうかということまで論じている。一言語学徒に過ぎない私がそのようなことにまで口を出すのが僭越であることはよくわかっているが、残り少ない人生を生きる中での戯言とどうかご容赦願いたい。私には木田章義の次のような趣旨の物言い[7)]が、本人が認めるようにいかに「極論」であろう[8)]とも、一度耳を傾けてみる価値のあるものに思えてならないのである。最終論文（5-2）をも参照されたい。

> 羊は、あまりに寒くなると横の羊の腹の下に首を突っ込み、その羊はまた横の羊の腹の下に首を突っ込み、全体で輪になって密集して動かなくなる。鞭打たれても、犬をけしかけられても、動こうとはしない。そして強い風が吹けば、その風に逆らおうとせず、畜舎と反対の方向へも流されて歩いていく。そうした事態を避けるために羊の群れの中に少数の山羊を混ぜておくと山羊の後について畜舎に帰っていく。山羊は西洋人の生活感、羊は日本人の生活感である。山羊は、風が吹こうが、寒さが来ようが、決められた通りに、あるいは自らの意志で行動し、羊はその場その場の状況に応じて行動する。一見、羊は愚かに見え、山羊のように生きることが尊いと考えがちだが、果たしてそうなのだろうか。今、私たちは、西洋の価値観の影響で、人間というものは自分の意志ですべてを決定することが望ましく、一つの思想や哲学で自分の人生を貫くことが重要であるという思いを持っているが、それがいつまでも正しいものの見方であるとされ続けるかどうかはわからない。いつの日にか、そうした何らかの原理で行動を規制しようとする態度が「いとおほけなき」[9)] 業であり、各人各様の素質を持った人が、その場その場の流れに応じて、またその時々の感情に従って、行

動していくことこそが正しいというように価値観がひっくりかえっていることも考えられよう。

フロイスは著書[10]の中で「ヨーロッパでは言葉の明瞭であることを求め、曖昧な言葉を避ける。日本では曖昧な言葉が一番優れた言葉で、もっとも重んぜられている」と書いている。今でも確かにそうした面はあるかもしれない。ただ「明瞭」は良く、そして正しく、「曖昧」は悪く、そして誤っていると捉えるとしたら、それはあまりに短絡であろう。

自己の主体性を重んずる文化か、周りとの協調性を重んずる文化か、人と議論するとき相手を説き伏せることに価値を置く文化か、相手も自分も間違っているかもしれないと考えながらお互いになんとか第三の道を見出そうとする文化か（こうしてふたつにはっきり分けてしまうことにも大いに問題はあるのだが）。私たちは今、そのあたりをうろうろしているような気がする。何が正しいかなど決めることは実は誰にもできない。ただなんとかよりよい（あるいは少なくともより悪くはない）と思われる方向に向って歩み続けるのみである[11]。今求められているのは、その時その時の流れ（状況）の中で適切な判断のできる力を養うべく各人が日々精進することではないだろうか。

注

1）フロイス 31 歳、ロドリゲス 15、6 歳で来日。
2）松田毅一・川崎桃太訳『日本史』全 12 巻（中央公論社　1977 ～ 1980）。
3）『日本大文典』（1604 ～ 08　長崎刊）、『日本小文典』（1620　マカオ刊）。
4）ただし中浦ジュリアンは当日病気で教皇に拝謁できなかった、あるいはこれら少年たちは聖書の故事にならい「東方の三博士（三王子）」でなければならず、ひとり留め置かれたとも言われている。（若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ』集英社　2003）。
5）ヨリッセンはフロイスが「改宗ユダヤ人」であった可能性に言及しているが、これも極めて示唆的な指摘である。（エンゲルベルト・ヨリッセン「十六・十七世紀における日本とキリスト教」〔『現代における人間と宗教』京都大学総合人間学部公開講座　1996〕）。
6）たとえば、ダグラス・マレー『西洋の自死』（東洋経済新報社　2018）。
7）木田章義「古典学の再構築」3（文部省科学研究費特定領域研究　1999）p.57。原文の意を損なわない範囲で（木田氏の許可も得て）文体を含め若干書き直してある。

8）もしこうした発言を「ただ周りに流されろ」と誤って捉えてしまったら極めて危険である。次の一書も大いに参考になる。施光恒『本当に日本人は流されやすいのか』（角川新書　2018）。
9）「身の程知らずの傲慢な」姿勢を示す言葉であると解釈する。
10）岡田章雄訳『日欧文化比較』（大航海時代叢書 11　岩波書店　1965）p.629。
11）巻末の「欧文論文リスト」に掲げた次の二論文も参照していただけたら幸いである。

“Reading *Haiku* poems in English with special emphasis on personal pronouns”

“Supplementary note to the section ‘Cogito ergo sum’ in the article ‘Reading *Haiku* poems in English with special emphasis on personal pronouns’”

目　次

はじめに …… i

1　キリシタン文献概観 …… 1

1 「大航海時代」の語学書から学ぶもの …… 3

2 ザビエルとロドリゲス
—— 16・17 世紀イエズス会の言語研究 …… 23

〔コラム〕ザビエルの接した文字 …… 37

3 「古典」としてのキリシタン文献
—— その語学書について …… 39

4 「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献
…… 53

〔コラム〕キリシタン語学研究のこれから（1） …… 74

〔コラム〕キリシタン語学研究のこれから（2） …… 79

2　ロドリゲス文典 …… 85

1 中世日本語のサ行子音
—— ロドリゲスの記述をめぐって …… 87

2 Interpreting the interpreter …… 99

3 ロドリゲス日本文典におけるポルトガル語正書法
—— /ãw/ の表記について …… 117

4 通事伴天連ジョアン・ロドリゲスのポルトガル語正書法
—— /ej/ の表記について …… 127

5　通事伴天連ジョアン・ロドリゲスのポルトガル語正書法規範 —— 語表記の「ゆれ」からの考察 …… 135

6　ロドリゲス文典成立の背景 …… 149

〔コラム〕ロドリゲス …… 163

3　キリシタン文献ローマ字表記成立の背景 …… 169

1　キリシタン資料「開合表記」成立の背景 …… 171

2　キリシタン資料における f 表記をめぐって …… 183

3　「ポルトガル語正書法小史」補説 …… 189

4　キリシタン文献ローマ字表記 I J V U について …… 195

〔コラム〕キリシタン資料 …… 199

〔コラム〕日葡辞書 …… 208

4　コンカニ語・コンゴ語文献 …… 211

1　Thomas Stephens とコンカニ語 —— 研究序説とその展望 …… 213

2　コンカニ・ポルトガル語辞書二写本の関連についての一考察 …… 235

3　コンカニ語ドチリナ・キリシタン成立の背景 …… 239

4　コンゴ語版キリシタン要理（1624）第一章 —— コンカニ語版・日本語版と対照させて …… 259

〔コラム〕亀井 孝 …… 294

〔コラム〕言語学と言語史 …… 296

5　言語から見た近代ヨーロッパの一側面
―― 非人称構文とキリスト教 …… 301

1　非人称構文に関する一考察
――「記号体系としての言語」の外から眺めてみると …… 303

2　非人称構文に関する一考察（補説）
―― デカルトの EGO …… 329

〔コラム〕人の「偉さ」 …… 341
〔コラム〕がんばるとたのしむ …… 342

初出一覧・欧文論文・翻刻・諸索引リスト …… 345

索　　引 …… 355

あとがき …… 359

索　引

2:3 等は、2 章第 3 節の意。論文 35 等は、p.348 ～の欧文論文で本書未収録のもの。

〔書　名〕

アナバシス (Anabasis)　240
カルティーリャ (Cartilha/Cartinha)　57
ドチリナキリシタン (Doutrina Christã)　40, 44-46, 4:4
日本イエズス会版キリシタン要理（亀井・チースリク・小島）　45
ドチリナキリシタン (Doutrina Christã) コンカニ語　4:3
フロスクリ (Flosculi)　207
ぎやどぺかどる (Guia de pecadores)　49, 202
ウズ・ルジアダス (Os Lusíadas)　63
プラーナ (Purana)　215, 220
天草版エソポ物語　4-6
天草版平家物語難語句解　131, 179, 202
金句集　201
日葡辞書　13, 40, 174, 3: コラム 2
日本コレジヨ「講義要綱」　49, 207
日本小文典（ロドリゲス）　105, 2:4, 2:5, 2:6, 172, 178, 論文 38
日本大文典（ロドリゲス）　104, 2:3, 2:4, 2:5, 2:6, 172, 178
方法序説　336
雪国　305
落葉集　201
ラテン文典　56, 82
羅葡日対訳辞書　16, 39, 174

〔人　名〕

アレキサンダー大王 (Alexander)　79, 240
アルヴァレス (Alvares, Manoel)　56
アンシエタ (Anchieta, José de)　26, 62, 192
アラウジョ (Araujo, Antonio Martins)　189
アスンサン (Assunção, Carlos)　82
フランコ・バレト (Barreto, João Franco)　118, 157
マノエル・バレト (Barreto, Manoel)　131, 134, 179, 202
バロン (Barron, J Patrick)　ii, 4: コラム 2, 321, あとがき
ジョアン・デ・バロス (Barros, João de)　1:2, 55, 57, 81, 145, 172
ブエスク (Buescu, Maria Leonor)　69
カブラル (Cabral, Pedro)　9, 54
カレピーヌス / カレピーノ (Calepinus)　42, 56, 83, 204
カモインス (Camões, Luis)　63
マテウス・カルドーゾ (Cardoso, Mateus)　ii
チースリク (Cieslik, Hubert)　23, 34, 154
コリャード (Collado, Diego)　199
コロンブス (Colón, Cristóbal)　8
クーパー (Cooper, Michael)　101
ジェルソン・ダ・クーニャ (Cunha, José Gerson da)　221
デカルト (Descartes, René)　320, 326, 5:2
バルトロメウ・ディアス (Dias, Bartolomeu)　7
ドミニコ (Dominico)　239
ダンフイ (Dunphy, Walter)　229
エーベルト (Ebert, Harald)　327
エチエンヌ (Estienne, Robert)　56
オイゲン・ヘリゲル (Herrigel, Eugen)　334
アシジのフランシスコ (Francisco d'Assisi)　239

フレイレ (Freire, João Nunes)　56
フレイレ (Freire, Laudelino)　144
フロイス (Frois, Luis)　i, 256
ヴァスコ・ダ・ガマ (Gama, Vasco da)　8, 77
ガンダヴォ (Gandavo, Pero de Magalhães)　57, 2:4, 145, 172, 177, 193
エチエンヌ・ジルソン (Gilson, Etienne)　336
ゴメス (Gomes, Helga)　232
ゴンサルヴェス (Gonçalves, Maria Filomena)　31
グリーンバーグ (Greenberg, Joseph)　303
エンリケ・エンリケス (Henrique Henriques)　58
イブンバットゥータ (Ibn Battuta)　21, 79, 240
ウイリアム・ジョーンズ (Jones, William)　51, 221, 230
マルコス・ジョルジュ / ジョルジェ (Jorge, Marcos)　44, 58, 202, 225, 240-242, 256, 257
エンゲルベルト・ヨリッセン (Jorrisen, Engelbert)　iv
ラディフォギッド (Ladefoged, Peter)　187
ドメニコ・ラガナ (Lagana, Domenico)　310
ロヨラ (Loyola, Ignacio de)　243
ルター (Luther, Martin)　241
ムンシ (Munsi, Roger Vanzila)　259
ネブリハ (Nebrija, Antonio de)　35, 56, 81
ニーチェ (Nietzsche, Friedrich)　341
プラタプ・ナイク (Naik, Pratap)　245
マヌエル・ダ・ノーブレガ (Manoel da Nobrega)　54, 79
ヌネス・ド・リァオン (Nunez do Lião)　31, 57, 2:4, 145, 172, 177
オリヴェイラ (Oliveira, Fernão de)　57, 145, 172
オヤングレン (Oyanguren, Melchor)　157, 201
パストラーナ (Pastrana, Juan de)　56
パウロ (Paulo)　80, 241
ペレイラ (Bento Pereira)　56
マルコ・ポーロ (Polo, Marco)　6, 240
アンタン・デ・プロエンサ (Antão de Proença)　60
ロード (Rhodes, Alexandro de)　61
ディオゴ・リベイロ (Ribeiro, Diogo)　75
ロボレード (Roboredo, Amaro de)　56
ロドリゲス (Rodriguez, João)　i, 4, 1:2, 54, 2 章 , 3:1, 223
ロドリゲス自筆本　2:4, 2:5, 2:6, 173, 179
アーネスト・サトウ (Satow, Ernest)　206
ソシュール (Saussure, Ferdinand de)　297
サイデンステッカー (Seidensticker, Edward)　305
トメ・デ・ソーザ (Tomé de Sousa)　54, 79
ソーザ (Teotónio R. de Souza)　51, 229
スティーブンス (Stephens, Thomas)　ii, 44, 51, 4:1, 4:3
ヴァリニアーノ (Valignano, Alexandro)　20, 102, 205
ヴィアナ (Viana, Gonçalvez)　97, 144, 193
ヴァルトブルク (Wartburg, Walther von)　318
ウィリアムズ (Williams, Edwin)　120
ウィクリフ (Wycliffe, John)　239
ザビエル (Xavier, Francisco)　i, 19, 1:2, 58, 199, 239
クセノフォン (Xenophone)　240
池上岑夫　164
石川博樹　256
井筒俊彦　5:1
伊東マンショ　i
上野善道　187
大谷篤蔵　334
小倉肇　152
風間喜代三　96, 322, 327
亀井孝　3, 18, 47, 83, 96, 186, 4:コラム 1, 4:コラム 2, 314
岸本恵実　82, 204
木田章義　iii, 232
木田元　331, 335, 338-340
栗須公正　327, 336
玄奘三蔵　21, 79
河野六郎　303

蔡毅　322
最所フミ　343
定方晟　311-313, 319
塩川徹也　336
新宮一成　337
関口存男　322
高田時雄　232
竹内敏晴　335
竹村文彦　188
千々石ミゲル　i
柘植洋一　232
土田滋　96
土井忠生　35, 96, 123, 159, 164, 208, 231
豊島正之　158, 187
内藤克彦　327
中浦ジュリアン　i
中谷英明　313, 319
長神悟　187, 198, 322, 336
西岡淳　22, 322
服部四郎　152, 184, 187
早田輝洋　152
原田裕司　83, 204
原マルチノ　i, 215
日高敏隆　304, 317
藤沢令夫　312
真下裕之　237
松本克己　316
松本亨　343
三浦雅士　331
峰岸真琴　314
美濃部重克　322, 335
森田武　186
山本和義　327
養老孟司　337
若桑みどり　iv

〔地　名〕

ベイラ (Beira)　89
ブラジル (Brasil)　9, 59
カナリン (Canarim)　229
エチオピア / アビシニア (Ethiopia/ Abyssinia)　243
ゴア (Goa)　65, 214
ジャパン (Japan)　11-13
メキシコ (Mexico)　81
セルナンセリェ (Sernancelhe)　109, 149, 158, 163
喜望峰 / カーボ・デ・ボア・エスペランサ (Cabo de boa esperança)　8, 54

〔言　語〕

バスク (Basque) 語　24
グアラニ (Guarani) 語　325
キンブンドゥ (Kimbundu) 語　17, 26, 論文 18, 20
キリリ (Kiriri) 語　17, 26, 59
コンゴ (Kongo) 語　44, 58, 225, 244, 4:4
コンカニ (Konkani) 語　17, 44, 74, 4:1-4, 論文 39, 40
ラテン (Latin) 文法　48, 81, 165
ラテン (Latin) 語　18, 24, 28, 42, 48, 51, 55, 164, 184, 196, 221, 297, 329, 336
マラーティー (Marathi) 語　50, 218, 229, 236
ンドンゴ (Ndongo) 語　58, 69
ポルトガル語　48, 76, 80, 105, 110-112, 2:3, 2:4, 2:5, 3:1, 3:3
タミル (Tamil) 語　17, 26, 31, 44, 58, 60
トゥピ (Tupi) 語　17, 26, 59, 62, 192, 309

〔一　般〕

-am/-ão　2:3
ç/s 区別　2:1, 2:2, 2:6, 191
ej　2:4
f（唇歯音・綴り）　3:2
h　146, 3:2
i/j/y　189, 3:4
k　146
q̃　190
r（ふるえ音）と ɾ（弾き音）　90
Φ（両唇音）　3:2
サ行音　2:1

ささやき　→ cicioso
歯音　2:6
破擦音　2:1
鼻母音　2:3, 2:5
摩擦音　2:1, 2:6
両唇音　3:2
cicioso　2:1, 2:2, 2:6
(ego) cogito, ergo (ego) sum　326, 329, 336
Ego sum via et veritas et vita　18, 47, 338
letras dobradas（二重字）　87, 90
predictable　308
pro-drop　307, 320
til（ティル）　139, 146, 190
VLCP　4:2
VLKK　4:2
アセント / アクセント　3:1
ありがとう　論文 25
イエズス会　39, 53, 64, 74, 79, 153, 174, 199, 256
イスラム　8, 20, 27, 63, 67, 303
一言語　19, 26, 62
印刷　20, 27, 63, 80, 241
婉曲語法　14
開合　3:1, 191
格辞　223
カテキスモ（公教要理）　17, 40, 46, 58, 66, 223, 4:3, 4:4, →ドチリナキリシタン（書名）
カトリック　13, 21, 202, 240, 256, 317
仮名遣　136
管区　65
関係詞　166, 論文 35
冠詞　28-30, 49, 81
漢文訓読　56
規範　203
曲用　221
キリシタン版　64, 82, 199
グループ語　16
個人規範　99
古典　16, 1:3
古典学の再構築　16, 50, 76, 324, 327
三位一体　44, 225
自我　330
自然　論文 28
宗教改革　239
主語　5:1
情況依存性　311, 316, 324
助辞　28, 81, 223
女性語　14
聖書　57, 67, 241
正書法　48, 76, 2:3, 2:4, 2:5, 論文 6, 9, 12
宣教師　24, 64, 80, 195, 209, 243
宣教に伴う言語学　20, 82, 205
大航海時代　6, 19, 20, 1:4, 67, 74, 79, 205, 209
多言語辞書 (Calepinus)　42, 56, 83, 204
中国管区　65
通訳　19, 24, 27, 41, 63, 240
てにをは　28
転換子 /shifter　337
天正少年使節　i, 57, 160
東洋化　45
ドミニコ会　183, 199
日本管区　65
猫の恋　333
俳句　316, 333
発見　6, 67, 77, 204
非人称構文　5:1, 5:2
非人称主語　305, 317, 325
品詞　221
ヒンドゥー教　226
複合未来　313
部数　58
翻訳　47
マラバール管区　65
文字　37, 51, 172
ゆれ　2:3, 2:4, 2:5
幼児語　95
連続性　4:コラム 2
和・倭　11
和紙　20
我思う、ゆえに我あり　326, 329-331, 336, → cogito